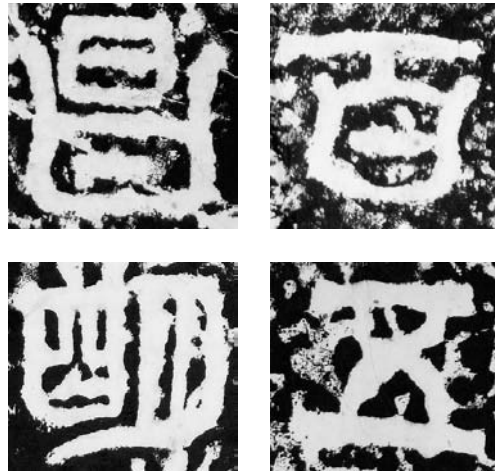


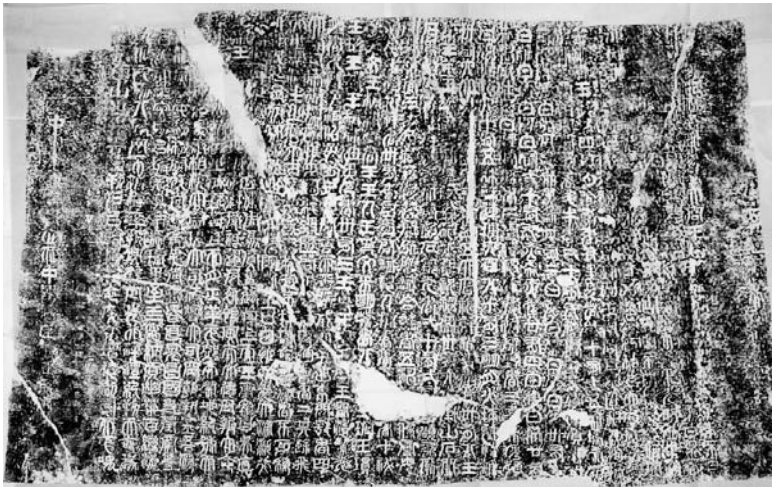
図版④



図版②



図版③



禪 國 山 碑

天璽元年(276)
(三国時代)

雄大な摩崖刻石⑤

木
雞
室

木雞室

伊藤 滋

「封禪国山碑」、「天紀碑」ともいう。独特の円柱状の碑形から「団(國)碑」とも称された。三国呉の国の天璽元年(276)に立てられた。書体は篆書であり、蘇建の書と伝えられる。江蘇省宜興にある。上がやや尖った円柱形をした碑石で周りには四十三行、一行二十五字が刻されている(図版③④)。(家藏整拓本などから一行あたり二十五字、行数は三十二行ほど数えることが出来る。)過去に度々碑面の文字に手を加えられたという。碑文は呉の徳を称賛する内容を記している。書風は左の主図版に示した整拓部分に見られるように文字の間隔はほとんど無く、字面は大変に太い。一見すると唐の顔真卿の楷書に通じるところがある。書体は、篆書であるが、図版②の「百」「五」字の横画の起筆の筆勢は、他の点画とはやや趣を異にする。数年の後に建てられた同時代の「天発神讖碑」の横画と同じ筆勢を示している。整拓本から見ることはできるように文字が割合よく見ることが出来るのは、後半部分である。(お詫び・今期は摩崖特集で進めていたが、今号は、摩崖でなく、碑を選んできました。小生が禅国山碑を調べもしないで、書風の状態から摩崖であると認識していたことによる誤りです。)

次回は、『雲峰山摩崖』です。この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りいただければ幸いです。

伊藤 滋 メールアドレス

mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

図版①（原寸）

大

元

司

郊

空

天



書道芸術院

平成の群像 (2011)



第63回毎日書道展出品 「春望」

「春望」



種谷萬城

2011年3月11日午後2時46分18秒に東北地方太平洋沖地震が発生しました。この未曾有の巨大地震と余震・津波は、大方の想定をはるかに超えた、大規模な東日本大震災を引き起こしました。4月上旬に仙台で開催が予定されていた書道芸術院の東日本展は、多くの会員の被災、展覧予定の作品が約700点、保管していた表具店もろとも津波に遭い、展覧会の中止を余儀なくされました。その後、桜の季節になっても、地震と津波の悲惨な爪痕や、解決の糸口が見えない原発事故、多くの死傷者、被災者、避難所生活の方々、心が激痛を起し、世の中は、追悼、見舞い、放射能の恐怖、風評被害、自粛ムード、買い控え、買占め、計画停電で、日本国中が震災前と一転した、暗く沈みこんだ日常生活となり、多くの展覧会が

中止や延期を余儀なくされました。そんな時期に、第63回毎日書道展出品として制作したのが「春望」です。「國破山河在 城春草木深 感時花濺淚 恨別鳥驚心 烽火連三月 家書抵萬金 白頭搔更短 渾欲不勝簪」の詩句が浮かび、追悼と復旧・復興への希望を込めて書きました。「春望」の2字は、金文の字形を基に、筆で書かれた線の躍動感ある表情を加え、生命感を盛り込みました。本文は、細めの行草書で、余白を利かせ、明るくしなやかな表情を加えました。大字と小字のコントラストを試み、伸びやかな生命力を感じる作品を目途しました。

震災後の、心が痛む日々の中で、書や、芸術の必要性を考えました。励まし、癒し、希望、勇気、協力、祈り、愛、優しさ、支え、等の様々な前向きな思いを込め、表現出来る手段が、私にとっては「書」だと、この震災を機に再認識しました。

書のひろば

理事長 辻元大雲

再び東北・宮城へ

Ⅱ 石巻・野蒜・女川・雄勝Ⅱ

4月末訪問より半年を経過し、その後の状況を視察。藤井英一毎日書道会関西支部長と千葉蒼玄院事務局長の車で10月31日、11月1日の一泊二日で回る。藤井さんは国際高校生選抜書道展20回記念誌の資料収集のため、主として石巻高校書道部を取材。石巻高校は当地の一流進学校、伝統校として千葉蒼玄さんの母校でもある。奥様の千葉紅雪さんは同校の養護教諭、更に書道部の面倒もしている。部員は30名余と多く、男子は2名と寂しいが部長を務め頑張っている。部員は皆震災の影響を大なり小なり受けておりながら、皆元気に作品制作に取り組んでいた。一年生を中心に実技指導をお手伝いさせていただく。今後の活躍を期待。

野蒜は海水浴場として有名であったが地盤沈下でどうなるか。あたりは人家壊滅状況でほとんど取り壊される運命のようである。女川はほとんど更地になっており、周辺は瓦礫の堤で重機が上で何台も作業していた。

雄勝は今回初めて訪れた。雄勝硯で有名で全国の硯の8割はここで生産さ

れているが、雄勝硯工芸館はじめほぼすべての工場、人家が破壊されている。硯伝統工芸士の高橋頼男さんのご案内で工芸館、市出張所などを視察した。震災当日の避難状況、かろうじて役場の屋上に逃れて命をながらえたこと、陸の孤島になって3日間救援が届かなかったこと、硯伝統工芸士職人が現在各地に避難しており生産のめども立っていないこと、でも鉱脈は露天掘りで道路さえ通じれば何とか再開も、などいろいろ身につまされるお話を伺った。書道に関わる者の一人として何とか支援の手を差し伸べなければと痛感した。仙台では二岡毎日仙台支局長と懇談、雄勝の現状などを話し合った。



雄勝硯工芸館前にて
高橋さん（中央）と右は藤井さん

院理事・評議員会開催 創立記念日講演会盛況に

11月23日、院創立記念日講演会が

上野精養軒で開催、先立って午前中に理事・評議員会が行われ、今後の諸行事、公益法人化への定款検討など重要案件を審議した。詳細は次号院報参照。

講演会は講師に中国浙江省出身の元女優で、映像プロデューサー、および中国のテレビ番組をネット配信する株式会社大富の代表取締役社長の張麗玲女士により「日中の間（はざま）で22年」と題して満員の盛況の中行われた。

中国から日本へ留学、東京芸芸大学大学院を卒業され大倉商事へ就職しての後、フジテレビへ経験もなかったドキュメンタリー企画を持ち込み、留学生の実態などを丹念に取材、素晴らしい内容で大きな反響を呼び、映画化までされ、フジテレビでは再放送が繰り返されたそうである。特に日中間のお互いに対する理解の不足、感情的な対立などに注目、なんとかその垣根をなくしたいとの情熱を持ち続けて様々な取り組みをされている。中国人の国家思想の激しさに対し、日本人はあまり国家を意識しない。しなすぎることにも問題だと指摘された。いろいろな考えさせられた講演で、参加者の反響は大変なものであった。

現代の書 新春展・チャリティ展

毎日書道会恒例の企画展も11回目を迎えた。2012年は辰年（壬辰）、和光会場は財団理事監事以上と64回展文部科学大臣賞受賞の永守氏計30名、セントラル会場は60歳以上の審査会員より100

名選抜で開催される。

*会期 1月5日～10日

*院関係出品者

和光（恩地春洋・辻元大雲）

セントラル（飯高和子・石井明子・板垣洞仙・大野祥雲・香川倫子・小竹石雲・下谷洋子・砂本杏花・浜谷芳仙）

*ギャラリートーク（和光会場）

1月7日（土）午後3時～恩地春洋

6日～10日まで連日開催

*席上揮毫（セントラル会場）

1月6日（金）午後1時～石井明子

6日～9日まで連日、各3名揮毫

毎日新春チャリティ書展

東日本震災支援と銘打って開催。

*会期 1月5日～10日

*会場 銀座松坂屋別館カトレア

*院関係出品者 21名（別記参照）

干支文字切手「辰年」発行

年末恒例になった干支切手が発行された。今回院大野祥雲常務理事が揮毫者に選ばれた。（左図）大いに活用ください。



刻字 (三)

小山 鳳来



小山鳳来刻

或る年の夏、香川峰雲先生に付いて毎日展の会場を見て廻っていた時。仲間の人突然「先生、先生この入賞作品の雅印の押印が横向きになっています」と鬼の首でも取った様な大声を上げた。

将来大物にはなれないぞ」と。
峰雲先生には年に何度か福島まで講習のためご足労いただいた。或る時先生の姿が見えないと思ったら、先生は洗面所で切れの悪くなった受講生のノミを磨いで居られた。私は全身に電気が流れた様な衝撃を受けた。その姿に思わず涙が出た。ものを教えるとはこういう事なのだと。百の説法よりも何よりもこの後姿こそ全てを語っていた。

峰雲先生から手取り足取り教えていただいた記憶は薄い。しかし物言わぬ姿から学んだ事は百萬言にも勝る。

人として一書人として生きるべき道をその姿から学び得た私は幸せ者である。謙虚に「常に芸術する心を忘れずに」と言われた言葉が私の創作の原点であり、いまでも私の作品を見てなんと言われるか。それを聞きたくてこれからも創作を続ける。

21世紀の書

—私の主張—

漢字 (三)

加瀬 澄春

平成23年も終わろうとしています。3月の東日本大震災は日本列島全体に大きな災害を及ぼしました。まだ復旧叶わぬ皆様にお見舞申し上げます。

私が展覧会で初めて賞をいただいたのは第28回書道芸術院展の秀作賞でした。入賞の喜びを初めて味わいました。その後毎日展、県展等展覧会出品を今日まで続けております。

常日頃は臨書や競書等の勉強をしますがそれだけでは物足りない。まず発表の場を持つこと。上手になつてからではなく上達の為に出品するのだと諸先生方も述べておられます。

では作品作りはどうしたら良い

のでしょうか。まず先生からお手本を貰う。これが一番近道です。次は自分で詩の選択をして字典で文字を調べる。私は漢字部ですのでまず漢詩から題材を選びます。唐詩選等を開き李白や杜甫の詩を選ぶのが定番でしょうか。文字の崩しの良いものや自分の好きな字の多い詩から選ぶと無理がありません。作品作りは一朝一夕には出来るものではなく試行錯誤の連続です。考え悩み苦しみ又喜びも、これらが同居しています。一本の線一滴の墨に何十年もの歳月が必要なのです。継続こそ力です。写真は47回毎日展で入賞させていたものです。



加瀬澄春書



小林 青峰
（長野）

「興」



東日本大震災の余りにも大きな被害に言葉を失う。一日も早い復興を祈りながら興と書いた。
良き師と仲間を支えられ、これ迄やってこれた。これからは、あせらず、あきらめず、この道を進みたい。

（青峰）



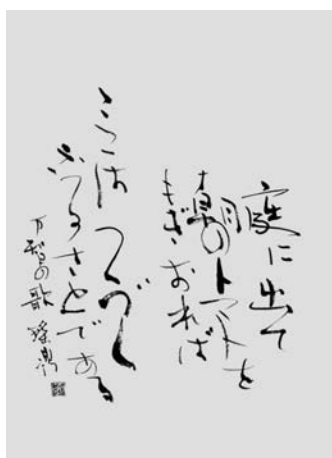
玉井 瑤鼎
（宮城）

「庭に出て朝のトマトをもぎおればこはつくづくふるさとである」

俵 万智

3月の大震災で一瞬のうちに失なった大事なふるさと。穏やかな日常が消えてしまった被災地に、一日も早くふるさとと呼べる地が戻ってくることを祈ってます。

（瑤鼎）



及川 祥空
（岩手）

「蝉しぐれ浄土庭園人の群」（自作）

隣り町の平泉の文化遺産が世界遺産に登録されたことにちなみ、かつて毛越寺を訪れた時の情景を句に詠み書作、明るく遠近感のある構成にしてみました。これまでに蓄えた書の力を基盤に、納得のいく斬新的な作品創りをと思っています。

（祥空）



高木 百合子
（群馬）

前衛書との出会いは高校生の時、以来35年、指導を続けて下さっている師と地元白玄会のよき先輩方のおかげで現在の私があります。

「萌」

生かされていることに感謝し、生命あるよろこびを表現できるよう、一步一步精進を重ねていきたいです。

（百合子）





井戸三扇
（大阪）

「徹」

小伏竹村先生の書法研究講座で、書の歴史いろんな書体に出会えて勉強不足乍ら好きだけで続けてきました。さらに好きに徹して、自分の思いを表現できるようになれば幸いです。

（三扇）



佐々木祐子
（青森）

「瞬」

今日の場との関りに生きる自分の思いを動く。これからも古典の書を読み、その感動をもとに、今を生きる証を前衛書に託して表現できよう心がけていきたいと思っています。

（祐子）



畑中玄石
（青森）

「殆辱近恥」

この作品は白文で書体印篆とし、千字文から選文しました。布字の際、バランス良く四文字を配置し、白文のもつ美白を重点として刻しました。しかしながら、もう一息刀法を大胆にズバリとやって線そのものの素朴に強くなりたい等課題は多くあります。

（玄石）



芳賀四秀
（宮城）

「うさぎ追いかの山 小鮒釣りしかの川」 高野辰之詩

東日本大震災―あの日は日時協展出品作を制作中でした。多くの友人、知人、兄弟が被災、一日も早い復興を願っています。その時の詩文に再度挑戦まだまだ未熟で反省ばかりです。今後は書を生きがいに進んでいきたいと思っています。

（四秀）



三井白水
（東京）



この度審査会員に推挙、昇格させて頂く事が出来幸でございます。諸先生、師の東福青筆先生、の温かいご指導の賜物でございます。謹んで御礼申し上げます。未熟者でございますが少しゆったりとした気持ちを持ち切磋琢磨勉強してまいりたいと思います。今後共よろしくお願い致します。

（白水）

平成23年度・新審査会員作品
ご紹介は、**◎**となりました。
（ご協力ありがとうございました。）



書道博物館 企画展 中村不折コレクション

日本の古代碑

多胡碑建立1300年を記念して

2011年11月15日(火)～
2012年1月15日(日)

多胡碑は、多胡郡(現在の群馬県高崎市吉井町)の設置を記念して、和同4年(711年)に建てられました。今年には、多胡郡が建立されて1300年になります。



書道博物館
CALLIGRAPHY MUSEUM

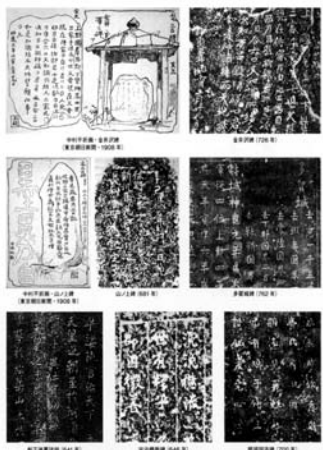
書道博物館 企画展 中村不折コレクション

日本の古代碑

多胡碑建立1300年を記念して

2011年11月15日(火)～2012年1月15日(日)

多胡郡は、多胡郡(現在の群馬県高崎市吉井町)の設置を記念して、和同4年(711年)に建てられました。今年には、多胡郡が建立されて1300年になります。



【ギャラリートーク】
日時：12月11日(日)10:00～、13:30～
中絶者が生誕した。等語が記された2005.11.15はがき(「日本経済新聞」に、郵便番号、住所、氏名(ふりがな)、電話番号、年齢、希望日時、「読者参加」に、郵便番号、住所、氏名を明記して送付すれば可なり。送付無料。500円以内の宛先が可なり。

1988スベールトラマ「道の上の」(第3部)の原稿に添った中村不折記念展では、正岡子規の遺稿や、中村不折が書いた「日本経済新聞」に関する資料なども展示いたします。あわせてご覧ください。

「郷土の文化財に学ぶ」

西川 翠 嵐

(漢字部・審査会員)

「むかしをかたるたごのこひ」これは我が上州群馬県の者なら子どもたちでも唱えることのできる呪文の様なことです。実は、群馬県には上州の風土文化財、人物をめぐりに詠み込んだ「上毛カルタ」なるものがあり、冒頭の句はその①の読み札なのです。小学生になれば誰もが始める上毛カルタ取りですが、残念ながら子どもたちの多くは何の事やら意味までは分からず口ずさんでいるのではないのでしょうか。でも誰でも覚えている一句なのです。そう、書道愛好家・書家の皆さんなら

すぐお分かりのことでしょう。日本三古碑のひとつ「多胡碑」のことです。私の住む高崎にはこの多胡碑をはじめ「上野三碑」と呼ばれる歴史的にも書研究の上でも大変貴重な文化財があります。私も小学生の頃父の自転車に乗せられてこの多胡碑を訪ねました。それこそこの文化財の持つ意味も何も分からぬ子どもでしたが何やらとてつもなく大切なものの前に立っているのだと感じたことを今も覚えています。今、この碑の裏には多胡碑記念館という郷土文化の保存、継承の為の施設



多胡碑原拓

井官符上野國片置郡緑野郡甘良郡并三郡内三百戸郡成給羊成多胡郡和銅四年三月九日甲寅宣左中弁正五位下多治比真人太政官二品徳積親王左大臣正二位藤原尊位石上尊右大臣正二位藤原尊

多胡碑全臨

西林乘宣先生書

も建ちましたが言うまでもなくこの碑は江戸の昔から多くの文化人によって愛され尊ばれて来ました。碑文によれば和銅四年(七一年)とありますから、あの「和同開珎」の弟分と言うことになりそうです。始めて書物に登場するのが室町時代。江戸時代には国学者高橋道斎らが拓を採り広く紹介。そして明治に入ると、北魏の六朝楷書を日本に紹介して日下部鳴鶴や巖谷一六に絶大な影響を与えた中国の能書家で金石学者の楊守敬がこの多胡碑を激賞します。彼は日本において古典籍の収集につとめ帰国すると楷書の字典「楷法溯源」を著し、そこに多胡碑から三九字を採録紹介しているほどです。その文字は悠々として筆の運びはおおらかで力強く、丸みを帯びた楷書体は北碑の代表鄭道昭の書風に通ずると言われます。

私がこうして書を志すことになりましたのは、母校明治大学書道研究部の門を叩いたことによるのですが、その

頃講師をして下さっていたのが書研のOBでもある今は亡き笹本扇城先生でした。当時は、一年生の男子はまず鄭道昭か龍門像造記のいずれかを選びそれ以外は学ばせてもらえないというような暗黙のルールがあったようで私は何も分らず鄭碑の方へ。男子十数名で各人全紙二文字を割り当てられ鄭文公下碑の臨書に挑んだことを覚えています。以来、その秋の文化祭も鄭道昭。その本質と神髄が理解できるまでずいぶん長い間、鄭碑の臨書が続きましたのも多胡碑との縁のような気がしてなりません。今後は多胡碑はもとより同じ「上野三碑」から「山ノ上碑」「金井沢碑」にも挑戦していきたいと思っています。今年には多胡郡建郡一千三百年。地元では様々な記念行事が行われましたが、ふるさとに学べるということは幸せなことですね。最後に写真は、我が師・西林乘宣先生の臨書で、現在多胡碑記念館収蔵作品の一つとなっています。

「師とのめぐりあい」

嶋田麗雲

(現代詩文書部・審査会員)

私は、この『書話シリーズ』の原稿依頼がきたときに、今までのどんな原稿よりも困りました。毎月、様々な方の原稿を読むたびに、皆さんの研究熱心で、真摯に書に取り組まれている姿に感動していました。しかし、自分の事を振り返ると、「書にまつわる事について」書く内容がありません。六歳に初めて筆を持ってから、30年程経つのに、ただ作品作りをする以外には何もせず、何も考えずにいた自分自身を恥ずかしく思います。もっと沢山の書に関する知識を増やしたり、絵画を見にいったり等をしていたら…。もしかしらば、それほど書そのものが好きでなかったのかもしれないと思います。そのような私に、書の道を選び、本気で「書の人生」を歩んでいきたいと心に決めさせたのは、師匠との巡り合いの他にありません。

私は、お習字ではなく書の道を歩み始めてからは、松山龍雲先生と、現在



二人の師と故郷舞鶴にて

の砂本杏花先生に師事しています。松山龍雲先生は、私が中学生の頃から御指導いただき、書の技術だけでなく、筆の洗いや、靴の揃え方、こと礼儀に関しては厳しく御指導いただきました。時にはその厳しさに反発した事もありましたが、亡くなられる最後まで深い愛情をもって御指導いただきました。今、振り返ると、その厳しさあってこそ、現在、作品には何より品格が現れるから怖いと気づける私に育ててくれたのだと思っています。

砂本杏花先生は、全てが憧れで、先生の全てが大好きです。以前にもこの院誌の中にも書かせていただきましたが、私は、書に臨む際には、睡蓮の花言葉にある「信仰・優しさ・純白」の気持ちで、そして睡蓮は、太陽のシンボルとされていますが、まさしく私にはそのとおりに映る師・杏花先生の書の世界に近づく事を目標に精進しております。先生の作品は、ここで申し上げる必要がない程、みなさんも御存知だと思いますが、一見、紙面に溢れる



砂本先生と東京にて鑑賞会

深くやさしいムードに包みこまれますが、実は強くてたおやかな先生そのものです。先生は、あんなにものしずかに見えるのに、その一面でお笑好きでチャームング、加えて、男前なところが大好きです。先生の物事に対する感覚も全て好きで、先生とよく一緒に洋服、化粧品、音楽、イケメンの話等をして、同じ物が好きだと先生に近付けたようで密かに嬉しい思いをしています。先生と私は、30歳以上違うのに、先生は、流行りの歌までよく御存知であつたり、先生は70歳とは思えない、いつもフレッシュな感覚を持ち続けられていて、尊敬するばかりです。先生と一緒にいろんな所に行かせていただく、全国に「砂本杏花ファン」は大勢おられる事を実感します。その方達にいつも私は、先生の弟子であることを心の中で自慢しています。

今、私はどうして書が続いているのかと尋ねられたら「作品は勿論、大好きで憧れている師匠の弟子としておいていただける事が、私が書の人生を本気で歩んで行きたいと決心できた全てです。」と答えます。師匠との巡り合いに感謝し、今後は真摯に書とも向かい合いながら、また、先生のお手伝いをさせていただきながら、師の世界の中で精進し、師の志を受け継げる努力をしていきたいと密かに思っています。

用紙 半紙普通判 左の法帖の中から
何文字臨書してもよい。（掲載部分以外は不可）

〈解説〉

蘇孝慈墓誌銘の筆法を観察すると、楷書の基本となる「三過折」（トン・スー・トン）を正しく行っており、起筆の角度も概ね45度に統一。左右の払いや、はねも

極めて明確に連筆されており、一点の崩れも見せぬ正確さである。横画から縦画へ移る転折の形は歯切れ良く、キリッと折り目正しい筆路を見ることができる。

特別研究部臨書課題

Ⅱ（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
○○臨

（押印のみも可）

中大夫大象元年授司衛上
大夫二年周靖授工部中大
夫開皇元年詔授太府卿
其年改封澤州安平郡開國
公尋轉司農卿逢舜日之光
華睹漢官之克復國淵天府

中大夫。大象元年。授司衛上／大夫。二年。周靖授工部中大／夫。開皇元年。詔授太府卿。／
其年。改封澤州安平郡開國／公。尋轉司農卿。逢舜日之光／華。睹漢官之克復。國淵天府。

かな研究部

でしやう
粘葉本和漢朗詠集（伝藤原行成筆） ③

特別研究部臨書課題

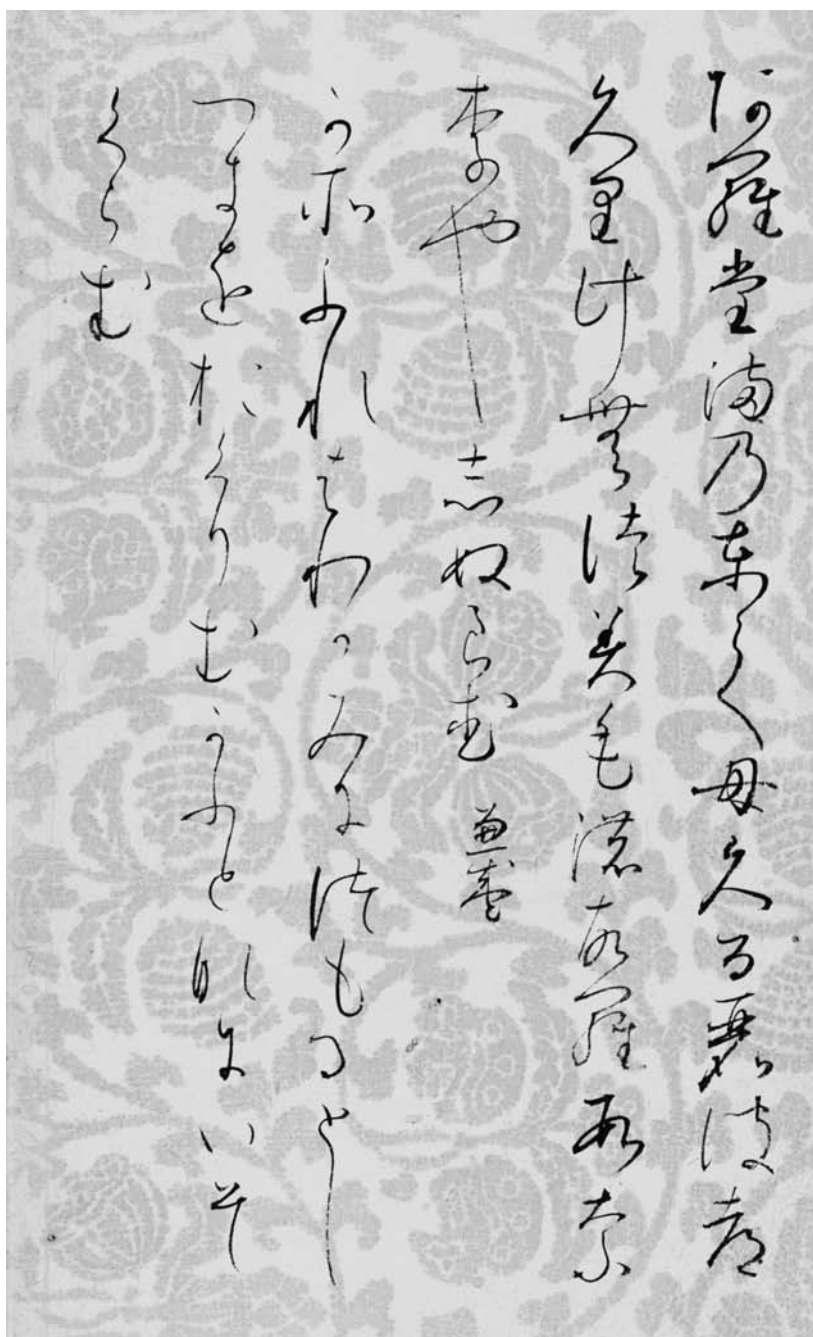
Ⅱ（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

〈よみ〉

阿羅漢乃東之母久留波都
あらたまのとしもくるればつ
くりけむつみものころずな
くもむらむ兼盛
りやしぬ

可所者可爾能
かぞふればわがみにつもととし
つぎをおくりむかふとなにいそ
ぐらむ

※落款を必ず入れる。署名、
もしくは〇〇臨
（押印のみも可）



（91%縮小）

〈解説〉

粘葉本和漢朗詠集の和歌は、漢字の使用が少なく、ところどころに交ざる変体かなは、デフォルメもないため解りやすい。全体の流れの中では、今回掲載の部分のように、変体かなだけで書かれた和歌もある。漢詩は、楷書の他行書や草書と、書体を書き分けて変化に富んだ書き方が施されているので、筆者は、かなにも視覚的な書式の変化を求めたと推察される。

Ⅱ注Ⅱかな研究部競書作品は、上の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。（全臨も可）
用紙

・半紙普通判（料紙可）

〈たて長に使用〉

※別紙を裁断して貼付も可。

・半懷紙は、半紙サイズに切って使用のこと。

漢字規定 初段以上 【二月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

辻元大雲 選書

習い方解説 (三)

辻元大雲

釣雪耕煙

(雪の降る中で釣りをし、もやの立ちこめる中で耕す。絶えず努力すること。「耕雲種月」の句もある。)

冬の句です。雪の降る中で釣りをし、もやの立ち込める中で耕す。絶えず努力することを意味します。やや軽いリズムで、明るく爽やかな表現としました。「煙」は異体字の「烟」を使っています。

書写体は活字体の対語で、かなり複雑になっている活字体を筆写上、書きやすいように省画、略体され、昔から伝統的に書き馴らされた書体です。筆写体とも文書体ともいいます。字形は時代と共に異なり、古文書や古写経では異体の文字が多くあります。

異体字は本来文字学に照らして怪しい文字をさし、正字に対して俗字、通字、更には偽字ともいわれ、乱れた文字とされます。

「烟」は「煙」と同義同字とされるもので、偽字ではありません。



釣雪耕煙

よみ (雪に釣^{ゆき}り煙^{けむり}に耕^{たがや}す)

書体||自由

漢字規定 秀級以下 【一月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

飯田春香 選書

山水 長遠

春香

水遠山長

よみ (水遠く山長し) (李羣玉)

書体 楷書

習い方解説 (三)

飯田春香

水遠山長 (李羣玉)

(ひろびろとした水、うち続く山々)

臨書の大切さは今ここの言うまでもありません。九成宮醴泉銘の書風は小、中学校の教科書にも使われる程馴染み深いものです。字形、バランス、字間等に留意し、欧陽詢の直線的でゆるぎのない点画の研究をして下さい。凜としたタテ画、勢いのある左右の払い等、運筆の速度、強弱など筆の弾力を使って勢いをつけましょう。

「水」のタテ画がゆるまないように、左右の払いでバランスを取りましょう。

「長」の横画は等間隔に。

かな 規定 初段以上 【二月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判（料紙可）

石井明子選書

習い方解説 (三)

石井明子

おほぞら 大空の月のひかりし清ければ
影みし水をまづこほりける
影見し水

（古今和歌集 よみ人しらず）

この歌をこの紙面にどう表現すれば最も美しいか、を想像することから私の制作は始まります。

- ①伸びやかで大きく見えること
- ②引込まれる濃密さがあること
- ③思いが伝わること

等々の条件を満たしながら、今の私が創るかなであっても、幽かに王朝の雅が漂うことを願います。

これは古今和歌集の歌です。その心は、激情でなく、安定した心情であり、その心情と一体化した言葉の調和だと言われています。

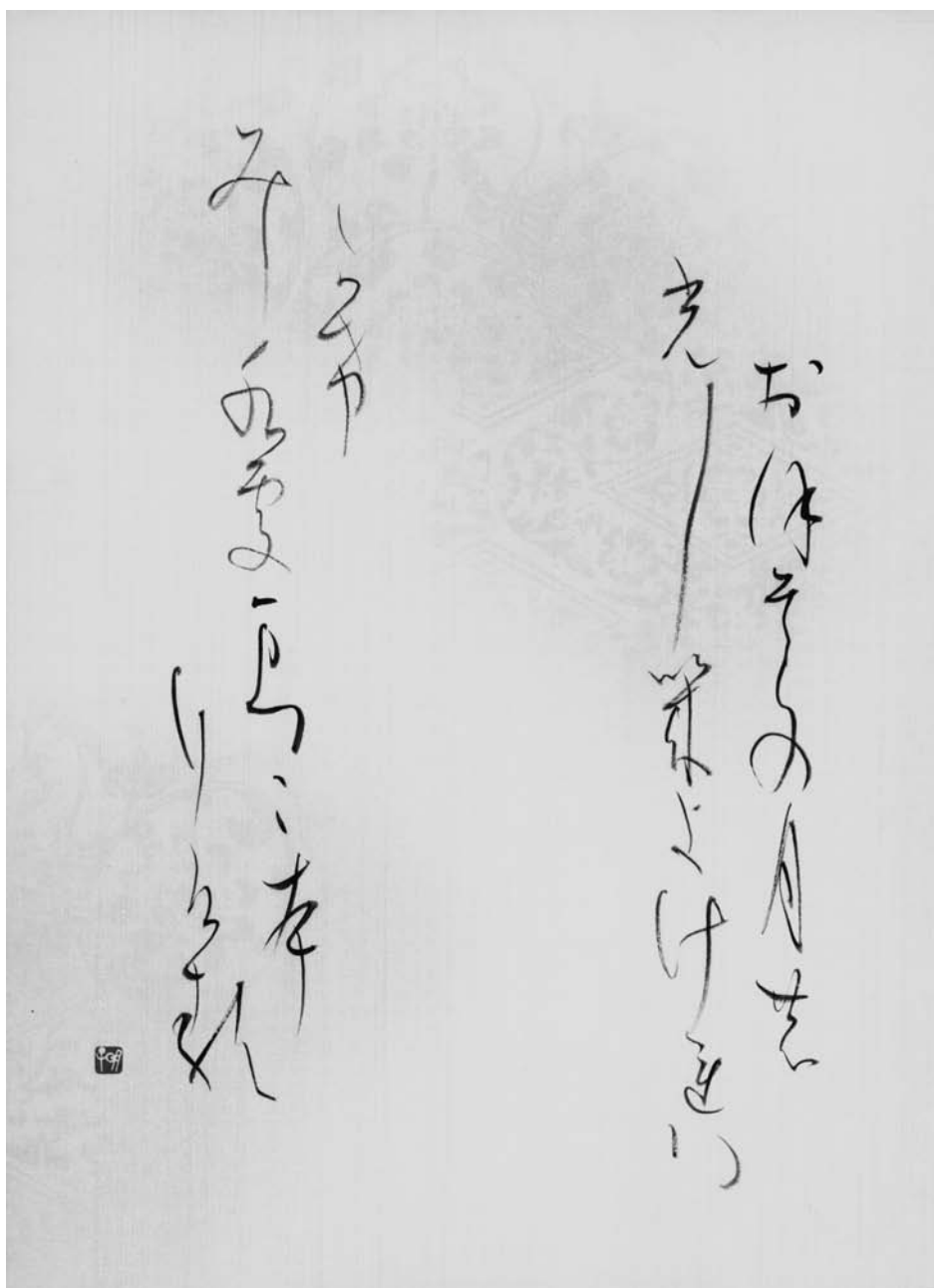
かなの学習に相応しい題材です。古今和歌集は成立した当時から、歌の重要なテキストであり、多くの写本が残されていて、臨書学習の重要な部分を占めています。

文字を書くことは自ずと鍛錬なので、静かに向き合いたしう。

よみ方

おほ(保)ぞらの月の(農)光しき(幾)よけれ(連)ば(八)
か(可)げ(希)みし水ぞ(處)ま(万)づこほ(本)りけ(介)る(類)

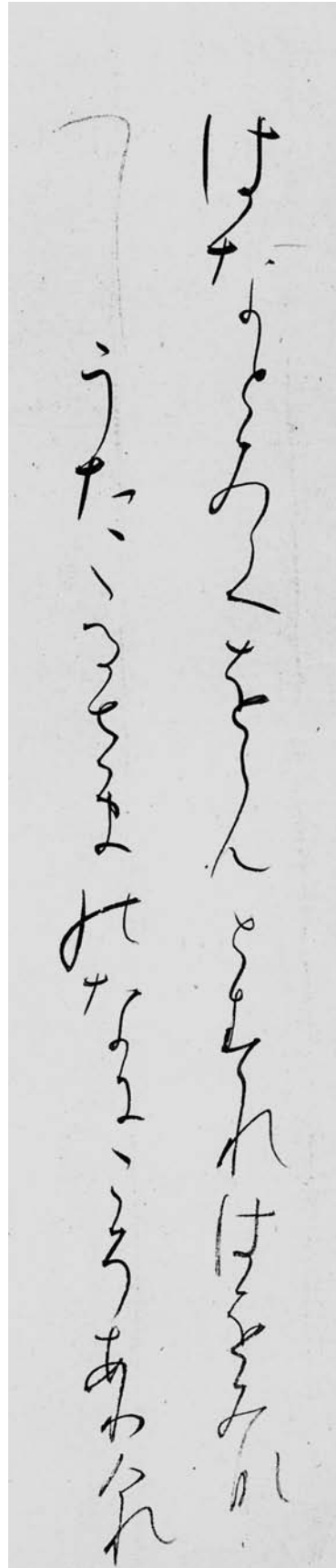
創作



かな規定 秀級以下 【二月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1/2 (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全臨、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野 切第三種
(掲載写真縮小93%)

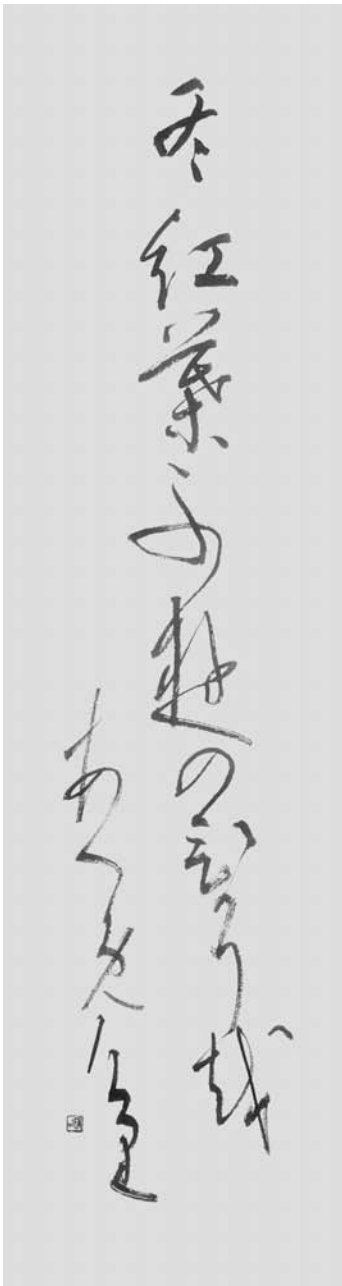


よみ方 はなとみて(三)をらんとす(春)ればをみな(那)

へしうたゝ(あ)るさまの(能)なに(尔)こそ(曾)あり(利)け(介)れ

かな条幅規定 【二月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

奥田 瑞舟 選書



よみ方 冬紅葉冬(ふ遊)のひ(飛)か(可)りを(越)あつめ(免)け(介)り(里)

創作

習い方解説 (三)

奥田 瑞舟

冬紅葉冬ふゆもみぢふゆのひかりをあつめけり

(久保田万太郎)

俳句一句を作品にする時心持が盛り上ります。選句して、字を選び、構成を考えている時です。

今回《冬紅葉》は最初のイメー
ジ通りです。次の冬と、ひかりの
表現を考えます。色々工夫してく
ださい。(ふゆ・光)

あつ免まで一氣に書いて、介里
で墨をきかせましたが、あつ免で
含墨しても良いと思います。

※たて形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 【二月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

竹田尚堂選書

習い方解説 (三)

竹田尚堂



停車場坐愛楓林晚 霜葉紅於二月花
(車を停めて坐に愛す、楓林の晩、霜葉は二月の花よりも紅なり)

杜牧「山行」 書体Ⅱ自由

前号に続き杜牧の「山行」の後半。霜によって紅葉した楓の葉の鮮やかな様を詠んでいます。粗野にならない程度に運腕を大きく、筆を闊達に運び、勁い表現を考えました。そのあまり、少し強弱が足りなくなりました。七字七字の配字にしましたが、末尾の下之余白が無くなると作品が重くなります。

漢字条幅規定 秀級以下 【二月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

小浜大明選書

習い方解説 (三)

小浜大明

繞屋樹扶疏

大明書

繞屋樹扶疏

(屋を繞りて樹扶疏たり)

(陶潛)

書体Ⅱ自由

「家の周りの生け垣が、生き生きとしている」の意味です。今回は褚遂良の書風を念頭におき、少々細目の表現をしました。褚遂良の作品の中でも、高度な技術が駆使され、格調が高いとされる雁塔聖教序などを参考にされたら良いと思います。

恒例の忘年会を開催しますので、
ご案内申し上げます。何かとご多忙
の事と存じますが、是非、ご出席下さい
ますようお願い申し上げます。

日時 十二月二十五日(日)午後七時より

会場 東京屋

会費 五千円

雪枝書

用紙Ⅱはがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体Ⅱ自由

習い方解説 (三)

見越雪枝

十二月です。一年を振り返る時期になります。忘年会の案内状を書いてみます。返事がほしい場合は往復葉書にすると、重宝です。

日時、会場、会費等の案内を通知する為、頭語、末語を省き主文のみとしました。

書き方は、漢字を楷書、かなを同じ様な大きさに仕上げてみました。

(会場の後、住所や電話を入れますが、ここでは省略します。)

※落款を必ず入れる。

(自分の名前を入れること)

木一作品 各部総評

NO. 606

漢字部 師範 鶴田 恵子

造像記風の表現で秋の語句を爽やかに演出した。六朝の書をよく学んだ人のような。

◎漢字部総評 上級者に創作の意欲溢れる作品が見られ頼もしいが通俗に陥らぬよう、併せて古典を学ぶことが肝要。
(翠風評)



漢字条幅部 師範 田中 蒼子

鶏毛筆使用か、独特の破筆と潤濁の変化が紙面に動きを与え、リズムカルな表現となった。

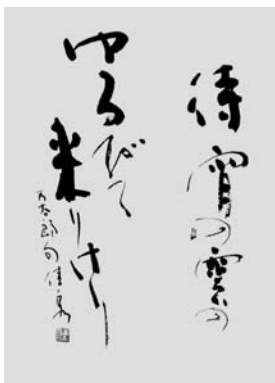
◎漢字条幅部総評 秋の昇級試験後のためか質量共にやや低調。普段の地道な練習努力が基礎力を養う。継続は力なり。
(大雲評)



現代詩文書部 特選 奥野 佳泉

墨をたっぷり含んだ文字と渴筆の差、筆先のタツチの強弱も見事に操り、奥行きのある空間を生んだ。

◎現代詩文書部総評 作品制作の意図がしっかりしている方が増えてきたようで楽しみです。
(鄭雲評)



かな条幅部 師範 武藤 房枝

激みない筆の繊細な動きが爽やかで美しい。過不足のない表現は格調高く、魅了されています。



前衛書部 特選 荒川 空華

力強い曲線と鋭い細線の運筆が絶妙。下部中央に美しい余白を残した構成、力量ある見事な作品。

◎前衛書部総評 多様な表現で個性豊かな作品多く息遣いを感じるが、落款にも心欲しい。
(慧香評)

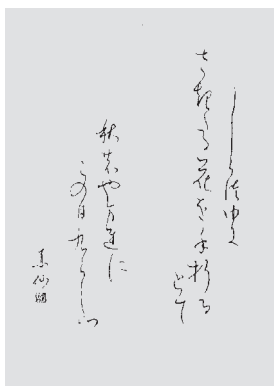
◎かな条幅部総評 全般に正確で雰囲気よい作が多く好ましい。墨は濃淡共極端な人が目立った。美しい墨色を目指すこと。
(明子評)



かな部 師範 川元 菜仙

古筆の研鑽を伺わせる筆致で、用筆や線の美しさは見事／やや字粒小さく、濃淡の変化にも配慮を。

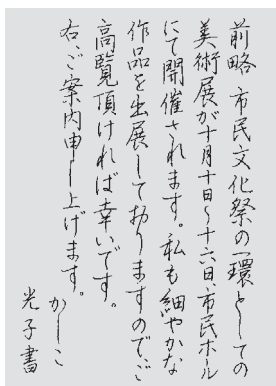
◎かな部総評 やま路と書く時の路は、変体かなでろとも読むので行書に近い草体の方がよい。全般に文字が小さすぎ残念。
(洋子評)



ペン字部 師範 石井 光子

重厚な線で大作の風格がある。一点一画おろそかにせず、それでいて流れリズムもよい作品である。

◎ペン字部総評 全体にしっかりと書けている作が多かった。ペンにより線質が変わるので太細を研究してみると作風が変わる。
(暁雲評)



今月の

特別研究部優秀作品(特選)

臨書

(英峰)

佐藤桂香

「蘇孝慈墓誌銘」

董權助之平欲渡河北漢光與鄧禹計同
將涉江南晉武共張華意合及偽徒平弥
齊相高阿那肱已下朝土數百人公受詔
慰納并率所領影援高隆之兵還授

佐藤桂香臨

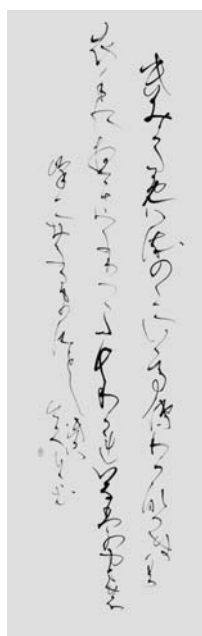
137×35cm

かな

(前橋)

碓井 弘

「百人一首」



碓井 弘書

170×53cm

◆九成宮に続いてのホープ。的確な臨書力に敬服。もう少し強い線が入れば更にもと思う。

(大雲評)

◆一字ずつの忠実な把握のうえ、作品として成立させる困難さを克服しての力作。繊細さが美しい。

(明子評)

◆全体のまとめがきれいに出来ている墨の含みにやや無理な所を感じたが、それを押し切る強さがある。

(倫子評)

◆すっきりと透明感のある線で空間に響いている。臨書としてはもう少し素朴さがほしい気もする。

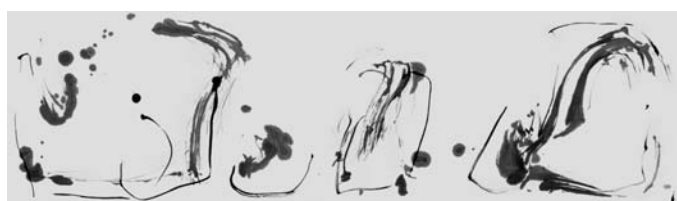
(蒼玄評)

前衛書

(行徳)

浅見 由紀子

「飲」



50×170cm

浅見 由紀子書

◆リズムミカルで明るい作。濃淡の墨の使いわけが絶妙で軽やかさを醸す。ローマ字の印が効果的です。

(明子評)

◆ポエムのように何かを語りかけてくるような作品。前衛は技術も大切だがそれ以上に個性が大切である。

(蒼玄評)

◆抽象絵画を思わせる明るくリズムミカルな作。濃淡の線を交叉させ、奥行きのある立体感を見せる。

(大雲評)

◆口ずさみ乍らの運筆。しっとりとした雰囲気をも出し出している。終筆に流れすぎた感あり、一考を。

(倫子評)

篆刻 (大雲)
佐藤希雲
「方整雄偉」

揚子敬評 羅頌 刻



佐藤希雲刻

印影原寸大 4×2.5cm

漢字

(華祥社)

「遊」



58×88cm

安藤華祥

◆大胆な起筆から一気に収筆へと向う。やや粗さが目立つが、思い切りのよい制作スタイルを買いたい。

(大雲評)

◆体全体でこの一字に挑戦したはげしさを感じる。線の流れに淀みがなくそれが字に呼吸を感じさせる。

(倫子評)

◆奥行を感じさせる力強い筆は、胸倉をつかんで、是非をせまってくる。書とはかくあるべきと納得。

(明子評)

◆潤と渴的を射て空間を圧する。最後の線は今一歩くい込みがほしい気がする。又印の位置は右か。

(蒼玄評)

安藤華祥書

◆変形印を上手にまとめている。線の切れもよく構成にも無理がない。しいて言えれば釈文の研究を。

(蒼玄評)

◆久しぶりの篆刻作品。刀の冴えを感じるが点画の通貫にやや乱れあり。雄の佳など更に努力を。

(大雲評)

◆切れるような細い線、糸で引かれた鋭い強さを感じる。この強さを表現する詩に又会いたいものですね。

(倫子評)

◆細い線の優しい作品です。印以上に落款の味わい深さに引かれました。総合的力を更に期待します。

(明子評)

現代詩文書

(白珠)

工藤永翠

「推奴“チェンジ”より」

61×181cm

◆墨の色が光の具合でさまざまな表情を見せてくれる。思わず口ずさむ楽しさを感じる。落款一考を。

(倫子評)

◆離れて独自の構成に引き込まれ、近づいて切れのよい字に魅了される。深い光を湛えた墨運び佳です。

(明子評)

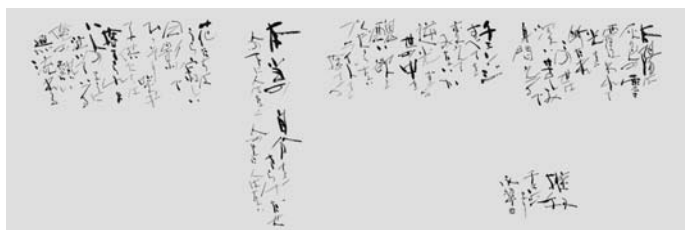
◆構成は考え過ぎの感はあるがそれを差し引いても作品としては品格がある。さらに線の種類があると輝く。

(蒼玄評)

◆メタリックな墨色が妖しい雰囲気とほのかな和らぎを感じさせる。紙面構成面白いが、不自然さも。

(大雲評)

工藤永翠書



総出品点数
81点

〈特選候補者〉

〔創作の部〕

〔漢字〕

八街 小川 白柳
墨宣 錦木 梅道
千葉 東原 扇桜

〔かな〕

志引 鈴木 朝夫

〔現代〕

うる 今関 心幸

もく 森田 藤谷

游水 荒川 空華

炎佳 佐藤 華炎

うる 篠原 楊流

〔前衛〕

青蓮 山崎 恵

四谷 野口 加奈

木原 尚子

蓮紅 大友 紅春

〔臨書の部〕

〔漢字〕

英峰 渡邊 多佳

千葉 小林 咲舟

千葉 村田 笑華

漢字研究部
(蘇孝慈墓誌銘)

選評 名 越 蒼 竹

今月のホープ作品



有 田 正 江

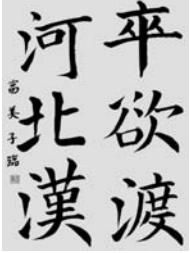
漢字研究部 特選 有田 正江

原帖に対して大変誠実な態度で臨書されている。細部まで観察が行き届き、どの点画も疎かにされていないところに好感が持てる。作品下部のやや窮屈な点が改善され、一層の線質の強さが加わると鬼に金棒である。

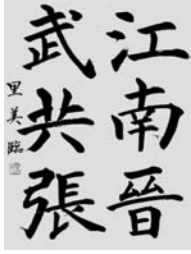
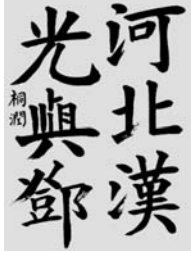
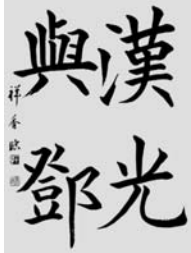
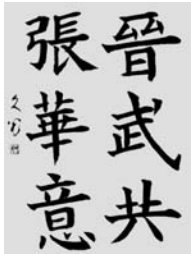
◎漢字研究部総評

蘇孝慈墓誌銘は、六朝造像記の書風から初唐

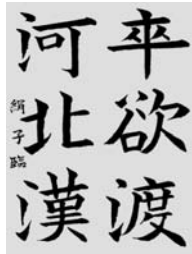
楷書の書風への移行期に属し、双方の特徴を併せ持つもので、観念的な捉え方ではその特徴を表現しにくい。そうではあっても、やはり知識を得、観察眼を養い、用筆・運筆の技術を身につけることが古典臨書のねらいとすれば、まずは虚心に古典を観察するところから始めたい。初心者ならばまだしも、達筆な方が原帖の特徴を全く無視して書いておられる例が散見されるのは残念なことである。



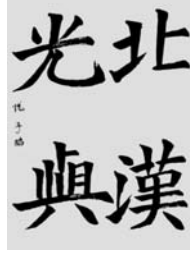
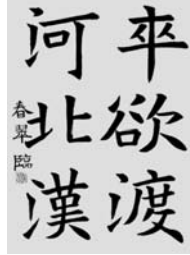
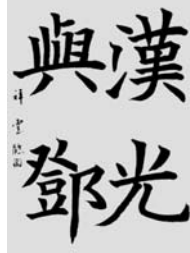
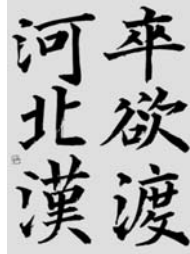
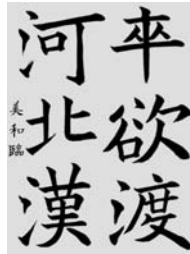
白富翠宏絹靖
美子蕙枝子峰
香子



里桐悦祥一久
美潤子香琴光



由江溪祥朱絹
美彩泉扇華子

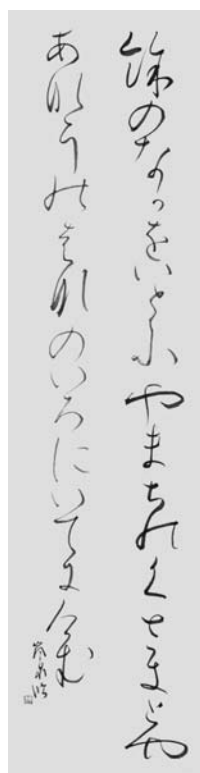


悦麗春祥直美
子流翠雲子和

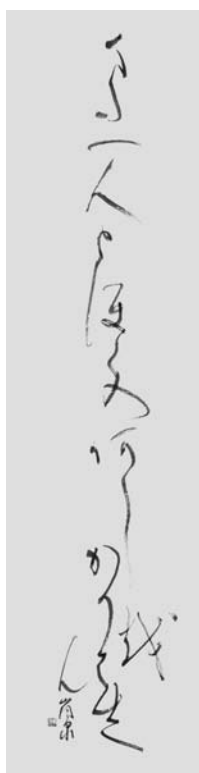
かな条幅 第三種 (臨書・創作・創作計三枚)

臨書 高野切第三種

卯月 新谷 風泉



創作 (俳句)



創作 (短歌)



総 評

一步一步着実な精進努力を

審査長 辻 元 大 雲

書の学習は単に文字の形を整え、美しく書くことではありません。色々な書体、書風の違いを理解し、応用して表現の幅を広げることが求められます。競書誌での月々の練習でも、漢字では楷書から行書、草書、更に篆隸と色々工夫して練習していると思います。形式も半紙を中心に条幅や更に展覧会形式まで多種多様です。かなやペン字も同様です。

昇級試験の科目は一種から三種まで多くの内容を課しております。臨書や創作などもあります。これらは書の基礎基本の技術の育成を目指すものであり、更に理論面や鑑賞力なども併せて養う目的もあります。一義的には段級の昇格を目的としますが、要は書の総合的な学習をこの機会に更に深めていただきたいと思います。

審査結果は結果として受け止め、一步一步着実な精進努力を期待します。審査を担当した先生方から各科目について概評をお願いしました。次回への参考として活用してください。

各 部 短 評

漢字

〈一種〉 高貞碑は北魏時代の楷書の逸品です。理知的で造形的な傾向の書の典型でその特徴をふまえて入筆や転折の厳しさを追及すると良いと思います。更なる精進を。
(三浦鄭街)

〈二種〉 楷書は点画をしつかりと書くことが大切であるが入筆終筆の押さえのあまいものがあつた。蘭亭叙は伸々と書くことが必要だが線が細すぎる作品が多かった。
(千葉蒼玄)

〈三種〉 端正な楷書を一点一画きちんと臨書した方がありよかつた。行書は点画の変化と省略を古典で習つてほしい。勝手なくずしの方が多し。草書は正確な字形から練習を。(大野祥雲)

かな

〈一種〉 初心の方は、まずは文字を理解し、連綿、墨色に注意し、用紙・印のサイズもかなに適した物を使用すると、より良くなります。一部課題違反がありました。
(勝山初美)

〈二種〉 臨書は比較的書き込んだ作が多かつた。臨書の応用を学び創作に移行すれば、特徴をつかむ事ができる。又、墨色によって流麗さが失なわれるので特に注意の事。
(見越雪枝)